精騎集

特別
イ 4
3159
A10

14
3159
A10

呼猿洞口無心卧月眠長水江頭正好抛綸

擲釣

金屑雖貴落眼成翳

人貧智短馬瘦毛長

覔火和煙得檐泉帶月帰

石靡笋斜出岸懸花倒生

秋風吹渭水落葉滿長安

禹力不到處河聲流向西

暗消溪畔雪輕折壠頭梅

移花兼蝶至買石得雲饒

寒雲抱幽石霜月照清池
山深無過客終日聽猿啼
臘雪連天白春風逼戸寒
因思執手經行處幾聽沙泉遠磵鳴
自笑一生無定力行藏多被業風吹
巢知風穴知雨
爭奈是非已落傍人耳便挽天河洗不清。
面赤不如語直
杜鵑啼處花狼藉
露濕草鞋重

鑿池不待月池成月自來
杜鵑啼斷月如畫不似尋常空過春
水淺無魚徒勞下釣
青山綠水短棹孤舟
長憶江南三月裏鷓鴣啼處百花香
桐花落地春將半不然杜宇催歸月過三
直鈎已掛雙峨碧一棹香飛蘆花風
刻舟尋劍緣木求魚
大海若知足百川應倒流
枯木倚寒岩三冬無暖氣

山深雪未消
山花開似錦　澗水湛如藍
野草連天不須短笛催歸
雲歸華嶽水到瀟湘
魚行水濁鳥飛毛落
堂虛貯明月　絕無片點塵埃　林邃撼清風
掃盡諸般障礙
一般擔枝得人憎　十載深雲獨掩扃
情閑宮樹看愈好　室靜磵泉聞轉幽
掬水月在手　弄花香滿衣

竹杖化龍去　凝人屏夜擔
有時拾得溪頭石　帶蘚和雲枕綠陰
忍成殘釁半賓夢　坐對寒鐙兩歲燈
天之有雲也可以蔽日月降甘雨地之有水
也可以濟舟楫潤焦枯人之有心也可以興
禍福制剛柔三才既明理歸一揆所以
然者何也卓挂杖大鵬展翅蓋十洲籬
遣燕雀空啾々
去時曉露消祥暑歸日秋聲滿夕陽
青松不礙人來往野水無心自去留

風靜日月正雲晴天地春
泉聲中夜後山色夕陽時
目機銖兩擧一明之
白鳥望中沒青山斷處幽
山高水深雲閑風靜
拾薪汲澗煎茶外倚杖閑看雲去留
洞房花燭夜金牓挂名時
龍驤雲起虎嘯風生
近山無榮燒近水無水喫
秋潭月影靜夜鐘聲

有三尺劒可以謁趙國無千里眼難以見懸絲
夜闌天際墮金盆脉上焦桐調轉新易水悲風
輕拔指鶯膠難續斷腸文

達磨見梁武帝

玉簫吹徹鳳凰臺古殿深沉曉未開滿地落
花春已過綠陰空鎖舊苔苔
冷冷寒溜注秋壑殘會滄溟便泛舟
扶過斷橋水伴歸明月村只知途路遠不
覺又黃昏

煙暖土膏民氣動一犁新雨破春耕郊原

眇々青雲際野草閑花次第生
舉玄沙因僧問盡十方世界是一顆明珠
學人為甚不會沙云用會作麼

金沙

琅々流水聲懷抱盡情傾不識春風面
雪消梅影清
溪水自涵山影清
春水綠浮影山光鴻入懷
懷州牛喫禾益州馬腹脹
只聞風度竹不覺雪漫山

夜深和月過平沙
劍為不平離寶匣藥因收病出金瓶
富嫌千口少貧恨一身多
陽氣未回吹律管野梅先開向南枝
雪後始知松柏操事難方見丈夫心
酒逢知己飲詩向會人吟
莫嫌老婦無盤飧笑指爐中芋栗香
笑看紅日上闌干
金以石試人以言試
韓幹馬嘶芳草渡戴嵩牛卧綠楊陰

江南春信早紫蕨已伸拳
多向洞庭青草岸楚天空闊不知帰
剖蒐蒐天 劈琴煮鶴
漢高祖給韓信而殺之身雖死其心果死乎
歴盡風霜歳月深
老樹臥波寒影動 野煙浮草夕陽昏
高空有月千明照 大道無人獨自行

（以上虚堂録）

天河　杜工部

常時任顕晦秋至最分明縱被浮雲掩
終能永夜清含星動雙闕伴月落遶
城牛女年々渡何曾風浪生

春宮怨　杜荀鶴（一作周朴詩）

早被嬋娟誤欲妝臨鏡慵承恩不在貌教妾
若為容風暖鳥聲碎日高花影重年々越
溪女相憶採芙蓉

秋宿臨江驛

南来北去二三年年去年来兩鬢斑舉世盡
從愁裏老誰人肯向死前閑渙舟火影寒
帰浦驛路鈴聲夜過山耳事未成帰未

得聽猿鞭馬入長安一作關

臨洞庭　孟浩然

八月湖水平涵虛混太清氣蒸雲夢澤
波撼岳陽城欲濟無舟楫端居恥聖明
坐觀垂釣者徒有羨魚情

送三藏歸西域　李洞

十萬里程多少難沙中彈舌授降龍
五天到日應頭白月落長安半夜鐘

咸陽城東樓　許渾

一上高城萬里愁蕭蕭楊柳似汀洲
溪雲初起日沈閣山雨欲來風滿樓
鳥下綠蕪秦苑夕蟬鳴黃葉漢宮秋
行人莫問當年事故國東來渭水流

酬暢當嵩山尋麻道士見寄　盧綸

聞逐樵夫閑看棊忽逢人世是秦時
閒雲種玉嫌山淺渡海傳書怪鶴遲
陰洞石幢微有字古壇松樹半無枝
煩君遠示青囊錄願得相從一問師

吳中別嚴士元

春風倚棹閶門城水國春寒陰復晴
細雨濕衣看不見湖花落地聽無聲
日斜江上孤帆影草綠湖南萬里情
東道若逢相識問青袍今已誤儒生

題李疑幽居　賈島

閑居少鄰並草徑入荒園鳥宿池中樹
僧敲月下門過橋分野色移石動雲
根暫去還來此幽期不負言

嵩山早行　溫庭筠

晨起動征鐸客行悲故鄉雞声茅
店月人迹板橋霜槲葉落山路枳花
明驛牆因思杜陵夢鳧鴈滿回塘

早行　郭良

早行星尚在數里未天明不辨雲林色
空聞流水声月從山上落河入斗間
橫漸至重門外依稀見洛城

酬暢當　耿湋

同游漆沮後已是十年餘幾度曾相
夢何時定得書月高城影盡霜重
柳條疎且對樽前酒千盤想未如

終南別業　王維

中歲頗好道晚家南山陸興來每獨往勝事空自知行到水窮處坐看雲起時偶然値林叟談笑滯還期

宮娃歌　李長吉

蠟光高懸照紗空花房夜搗紅守宮象口吹香鼉鼓暖七星挂城聞漏板寒入深惡殿影昏彩鸞簾額著霜痕啼鈎弔月鉤蘭下膝銅鋪鎖何甃夢入家門上沙渚天河落處長洲路顧君光明如太陽放妾騎魚撇波去

○

有求常百慮斯交未吾病　杜訪早發

遊山西村　陸放翁

莫笑農家臘酒渾豐年留客足雞豚山重水複疑無路柳暗花明又一村簫鼓追隨春社近衣冠簡朴古風存從今若許閑乘月拄杖無時夜叩門

○

澄神朗慮如山影鑑池面風神凜今

身寒淡心澤令意誠　書法及隅

語云登山耐側路踏雪耐危槁一耐字
極有意味如傾險之人情坎坷之世
道若不得一耐字撐持過去幾何不
墮入榛莽坑塹哉

惟恣則情平惟儉則用足

休與小人仇讐小人自有對頭休向君
子諂媚君子原無私意

癡人如盲如聾如瘖如啞虎川似病正是他攫人
噬人本事故君子要聰明不露
才華不逞德有肩挑任鉅的力量
仁人心地寬舒鄙夫念頭迫促
性燥心粗者一事無成心和氣平去
百福自集

巧趣不生多會池塘石間煙霞具足
會景不在遠蓬窗竹屋風月自
知足者仙境不知足者凡境

人生減省一分便起貶一分如交遊減便免
弱擾言語減便寡愆先思慮減則神
神不耗聰明減則渾沌一竅彼不求

日減五求日增若真種在此生哉

釋式隨緣吾傳書信四字是渡海的浮囊蓋世路花沈一念求全則萬緒紛起隨寓而安則無入不好矣

送某根譯

男兒甯當格鬬死何能怫欝築長城 陳孜三飲馬長城窟行

飲馬長城窟行一首。飲馬長城窟水寒傷馬骨注謂長城吏慎莫稽留太原卒官作自有程準築詣汝聲男兒甯當格鬬死何能怫欝築長城長城何連連三千里邊城多健少內舍多寡婦作書與內舍便嫁莫留住善事新姑章時二念戍故夫子報書征邊地君今出路一何鄙身在禍難中何為稽留他家子生男慎勿舉生女哺用脯君獨不見長城下死人骸骨相撐拄結髮行事君慊心意關邊地苦賤妾何能久自全（玉臺新詠）

全浙兵制日本象棋法

象棋彼國設名正棋呼音少棋以正字呼之為少者是也棋盤橫連河界九行直亦九行與中國象棋盤相似正用行而不行路也棋子兩營各有主將一營王將一營玉將各馬主其次序一金將次銀將次桂馬再次香車排定九行之邊左桂馬之前立一角行右桂馬之前立一飛車河界之次各立九步兵於九行內齊齊排定聽行例先舉步兵其角行飛車桂馬香

車皆次序聽行其金將銀將皆附王玉
將逐步徐行不令參差步兵亦逐步
序行止許進而不許退桂馬斜行如
象棋之馬同式則不容退返香車直行
與象棋之車同式角行大行四角飛車
直冲四路玉王二將金銀將逐步斜行
若斜紋之狀亦許過河倘路不通可使
退復假若兵馬過河除王玉金將不陞
外其銀將過河界即陞金將桂馬香車
步兵皆陞金將之名角行過河陞為龍

馬飛車過河陞龍王碁子面面有字
若得戰過河界則翻所陞之面用之俱
與金將一例行之無分步兵香車桂馬也
皆逐步斜進攻戰如兩營各輸子馬仍
聽言鵬者放入盤內行用完去子馬亦
如之但彼各兵將既臨我營至犯主
將之位倘我盤中無子將得彼子馬
聽放下盤遞敵如盤中子少手中馬
盡必可防可抵始分勝負如營主將
過河是為和局

文軌

無

棋子造法

棋子造製上尖圓下平方乃天圓地方之象上薄下厚乃天清地濁之象

勢將傳云將軍之手俱手執兵雖已陞金將之名與主將相征止將之默行不敢揚稱將軍之尤不敢衝其將軍之鋒如兵卒得其功次雖叨其銜祿舉其力而不敢恃其威也

棋子步法

王將玉將例行共八步前三步後三步左一步右一步金將例行共六步前三步後傍左右各一步角行例行斜角四步過河陞龍馬再加前後左右共四步飛車例行横直四步過河陞龍王左右前後共加四步桂馬斜行二步過河陞金將行步共金將同香車直行一步過河陞金將行步共金將同安兵直衝行一步過河陞金將行步亦與金將同如前路難進欲其退回逐步徐徐倒退如未陞之前例許進而不許退也銀將

過河陥金將行步相同其餘倣行 文軌

大鐵椎傳

魏叔子

大鐵椎不知何許人北平陳子燦省兄河南與遇宋將軍家宋懷慶青萍鎮人工技擊七省好事者皆來學人以其雄健呼宋將軍云宋弟子高信之亦襄慶人多力善射長子燦七歲少同學故嘗過宋將軍時座上有健啖客貌甚寢右脇夾大鐵椎重曰五十斤飲食拱揖不暫去柄鐵摺疊環積如鎖上練引之長丈許與人罕言語語類楚聲扣其鄉及姓字皆不答既同寢良半客曰吾去矣言訖不見子燦見牖戶皆閉驚問信之信之曰客初至不冠不韈以藍手巾裹頭足纏白布大鐵椎外一物無所持而腰多白金吾與將軍俱不敢問也子燦寐而醒客則鼾睡炕上矣一日謂宋將軍曰吾始聞汝名以為豪然皆不足用吾去矣將軍強留之乃曰吾嘗奪取諸响馬物不煩者輒擊殺之衆魁請長其羣吾又不許是以僅之我久居此禍必及汝今役半方期我決鬬某所宋將軍欣然曰吾騎馬挾矢以助戰客曰止賊能且衆吾欲護汝則不快吾意宋將軍故自負且欲觀客所為力請客客不得

已與偕行將至關處送將軍登空堡上回但觀之慎勿聲令賊知汝也時鷄鳴月落星光照曠野百步見人客馳下吹觱篥數聲頃之賊千餘騎四面集步行負弓矢從者百許人一賊提刀乘馬奔客曰奈何殺我見言未畢客呼曰椎賊應聲落馬人馬盡殺賊環而進客徐客揮椎人馬四面仆地下殺三十許人宋將軍屏息觀之股栗欲墮忽聞客大呼曰吾去矣但見地塵起黑煙滾滾東向馳後隊不復至　魏叔子文集

○黃陵廟

李遠　或云李羣玉

黃陵廟前沙草春　黃陵女兒苔裙新
輕舟短棹唱歌去　水遠山長愁殺人

○樓上醉歌

陸放翁

我游四方不得意陽狂施藥成都市大瓢滿貯隨所求聊為疲民起憔悴瓢空夜靜上高樓買酒捲簾邀月醉醉中拂劍光射月往往悲歌獨流淨刻却君山湘水平斫却桂樹月更明丈夫有志苦難成修名未立華髮生

自詠　呂洞賓

獨上高樓望八都墨雲散尽月輪孤
茫〻宇宙人無數幾箇男兒是丈夫

漁父　周菊岳

萬頃滄波欲暮天穿魚換酒柳攜邊
客來問我興亡事笑指蘆花月一船

絶句　黄遵谷

半蕊高春水一蓑煙抱月懷中枕斗眠
說與時人休問我英雄回首即神仙

○　少豔〻詩

頻呼小玉元無事祇要檀郎認得聲

○

欲持贈君無長物山中只有白雲飛

王維

○

渭城朝雨裛輕塵客舍青〻柳色新勸
君更盡一盃酒西出陽関無故人

杜牧

○

落魂江湖載酒行楚腰纖細掌中輕
揚州十年一覺夢贏得青樓薄倖名

長尾秋水

海上空拍月生潮波陰連牆影動搖注
是二千三百里北辰直下建瓴標

雲州八人

身落丹波丹後間何時畫錦慰慈顏
滿天雨蓑笠注過不考山

平胡曲

一生心肝為花花慈雨濃風幾度斷腸
注花殘知飛心去綠陰繁子子殉春 王

少楠公

老楠遺香甚苦心邪薰微芳山子樹春
千古風流君獨占扶疏不改折花人

○題江參字貫道山水橫軸画俞秀才所藏

陳簡齋

二首

卷中衣冠溪山去筆下明三湖初
不肯一禪為婦計俞郎作意未全疎
萬壑分煙高復低人家隨處有茅茨
此中只欠陳居士千仞岡頭一振衣 集十三卷

題趙少隱青白堂三首 內一首

靈雲芭蕉摩詰畫突兀梅葉簡齋詩
宦游相見那生客著倚琅玕一段奇

○

玉堦風轉急長城雪應闌（庾子山夜聞擣衣）

王昭君　　庾子山

拭啼辭殿里回顧望昭陽鏡失菱花
影釵除却月梁興腰無一尺金淚有
千行絲衫承馬汗紅袖拂秋霜別
曲真多恨哀絃須更張

巫山神女廟　　温飛卿

黯黯閉宮殿霏霏蔭薜蘿曉峰眉
上色春水臉前波古樹苦蒲尽兩
舟離恨多一叢斑竹夜環佩響如
何（杜甫昭君詩環佩空歸月夜魂）

以下

6丁

白紙

明治廿八年六月十一日　讀賣新聞

募集當選短篇小説（幸田露伴氏選評）

雀踊

漆山天童

（この欄にあるハ露伴氏の評語なり）

七歳八歳の頃の事の大概は、われ能く記憶あれども、五歳六歳の頃の事まで今迄覚まで忘れ難き事、唯一事あり。

われ躾質虚弱なりければ、猶紐付き草履にて漸く外出する頃、守する姉の手を離れて唯一人、門の前なる小川の石橋渡りて川に沿ふ道を川上にちよこ〳〵と走り出でぬ。路

陽炎弟一

傍に咲く黄なる蒲公英を戯るる白き蝶々を追はんとてなり。

陽炎燃えて目映き日なりき。花に居眠る胡蝶をあれ驚かせばと、夢駭ろきて飛ぶ

近邊に人無く路行く者もあらず。見渡せば田連りて畑あり、畑に並びて田あり、田には田螺の跡縦横に、畑には菜の花咲き満ちたり。

折柄小川の流れさゝめくのみ、一羽鳥鳴くのみ、

田螺の跡縦横に、何の事いなけれども、おもしろ。

鳴くのみならず己が身を水鏡、畔を島あり。

唯見る脚長くして路の如く、色黒くして鴉の如く、尾は短く嘴の尖りたるもの、唯一羽佇めり、今まで己を懷つば鶴なりき。

彼の禽は何を思ひ、何を懷ふのや。彼處には花の咲きのめり、彼處には蝶飛びめぐり、唯何時までも立尽すらん。

あれも同じく立尽せり。時の遷るを忘れ、蝶を追ふを忘れ、母の乳のもとりあり、彼を慕禽の姿の可笑けまじ。

蝶を取り出したるもめづらしく思ひし。

めくるめきさまは如何にも巧み描かれたれども、突然に過ぎたるやうなり。ここも如何にも節ぶしておのしろく描かれたり

今や陽炎はわが足下より起りて、菜の花を包み、雲雀を包み、菜の花を包み、鶯を包み、田を包み、畑を包み、遠く遠山を包み、高く高く、きら〳〵と天に昇ると見る間なりけり。

〳〵地山のとの山も川も皆動ぎて、われは眩暈き甚しく場に倒れまけり。

馬の嘶くあの身のほとりかと起りて、われ目を瞠げば、里の者の野に行くやあらん、手綱取る右のまを後にして左に馬鍬を撫げ〳〵、手拭もて頬被りしつゝ、尻切りの

流の附きまゝ半纏めきまゝ着る、茅布を着る、口に煙管を銜へたる、顔いかれ見知らぬど里の者のあらずしてやい。馬いまとかり空身なり。

ドシリ〳〵と地の響きを、踏まれやまもと恐ろしく、われ歩を返して呼吸をはずませたるのこゝはとくちぐち家に向て駆く。

坊ッちやん、怪くアないよ、駆けるでないが

ア、轉ぶとなんもわい

かく身後より呼び掛けられたる、われを待

人を怯れ、物を怯るる虚弱の心見のさまざまあるべく寫し出まゐらせり。

する姉君のおん馬の側よい寄るべうもあらず、そい小き者の踏まるる恐れあるべくなりと、常々われを戒むるに、他人の一言にいのでわれ容易く胸を安んずべき、豪情悪ろけれども後見らるる心も、振向く暇だに無く、とりかはと駆け去る。

わが家近くなりて、門の前なる石橋の見ゆるに、たる時、わが家の前は平坦なる道なるに、塵もなく掃き清めたる路なるに、何ぞは躓きけん、心見の足の力なく、踏止の為方なけきべいのやうと地に倒れぬ。驚く暇間も無く、鬼一口、わが首より腹より かけて喰いれけり。

鬼一口、黴臭ひれどもおかしろし

ちりれ母や姉、呼びりんすれど呼びんすれども、声も出でぬよ、馬い街へしまく一振り振るわれを持て行く、彼の大いなる口もて進るるべく。

さるにてはわれ、病む處を怪く安からかなるに、心を定て目を瞳くに、わが門の石橋の上に静と量の水ぬ。

馬をてハ世こすりき、喰いたるはあらざりき、倒るゝ間はなむづと打たゝを揺ぶけるは、馬の口取る男なりけり。その手綱をくゝる手綱と共に、煙管を横ゝ銜へしまゝ。

馬ハあれりは仇せざりけり、人いまとなり優しかりき。家ゝは母あり、妻には乳あり。吾は河の前、石橋の上ゝ呼息せり。植の下には小川の流れ、澱みを造るところ堰止めて物知る人は何とか名付く、われは其頃言にかりて、唯ドオ〳〵と今も呼ぶ小き澱と

枝の下の下蔭りおもしろし、水の泡を思ふのあたりと童見立てゝ、此の一篇に似合ひて甚だ妙。

蔭るところ、春の桜花の樹蔭、秋の紅葉の蔦の蔭、其水上の花も葉も落ちては流れ寄る處、浮いては沈み、沈みては暫し止まりてわが川よ、わまの出るを待つて流るゝ。

今まゝ單獨見て居れば、果敢なけれども泡沫の小き兒等の天窓と、泡を孕みて大坊小坊、消ゆるあり生るゝあり、何れか親、何れか子、情さゝめきて流れ流る川下見れば、仇せぬ馬と優しき人の過ぎ行く影の漸く遠く、天色青く

流る川妙に蓋取りされどいやに思はるゝ

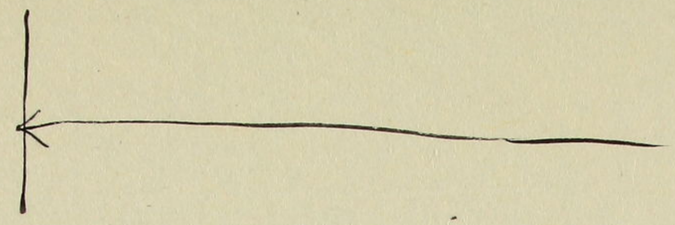
はあらず。文法のすぐなるまさをかし。

花より里く傳き出でて、用筆待的也。

笠深き顔の鼻と口のみの見ゆる、一向力なり、死漫なり。

地は黄なり。黄なるは高く森と聳ゆる天とは森としかもうつり、畑と林の菜の花なりて、其花蔭よりおん馬隠る。

笠深き顔の鼻と口のみの見ゆる、笑と含みて可笑しき窩、目を閉ぢれば今も猶、髪髢として見ゆる心地す。



たる、馬の手綱の如き深分の細き帯締め、手甲と脚絆は同じく淡黄色にして真白に草鞋穿き、天神にて振り分けに捧げたる物なり、その形盥の如く、浅くして五寸にもらず、何等の行高すや、中は窺き見たるのしなく、菅笠の如きものにて軽く一様に蓋したり。

笠深き顔の鼻と口のみの見ゆる、笑と含みて可笑しき窩、目を閉ぢれば今も猶、髪髢として見ゆる心地す。

橋の上より伺めるあるを横ぎり除けて、わが門の内へ入れる、後に付きてわれも入りぬ。笠深き者いわが家の軒下に立つと共に「サアサ見さいな、雀踊を見さいな」と高く声張り上げ囃し立つると共に、撥げる物を地へ下したり。

われに男子の兄弟なく、姉君のみ三人あり、その姉なる人の三人の中、何まなりしか忘れられど、まなる姉と覚ゆ、此の声を聞くと共に家の内より駆け出でて、われと肩を並べながら踞居て此の見物を見たり。

笠深きものは又声張り上げたり。

「サアサ見さいな、雀踊を見さいな、雀踊は面白や、ヽヽヽ」

と謡ひ上げ、鳥追のそれのごと、掌を拍きて「ほゝ」と叫びぬ。

その時、盥の蓋を中より何物か撥くと見えし、両方一時に高く、一寸、二寸、三寸ちょり明へへと見る間に物こそあれ、蛤には大きくて蝶螺さいかさきの、先づ一個

奇
蛤にはの一句、おもしろし

鴻雁來賓する秋のまとなつては海中の入つて蛤となる

千形が歌うた陽炎三

ぱらりと落つ、續いてぱらり、三個四個五個、見る間に其數二三十もやもうん、嘗の花笠ならずば、梯のそばなる蘆へつべき細小なる陣笠めきて、反山形なる。と頂き、頭は見えで嘴の尖り出でたる、月下千枝が歌うたものぐりし好箇のもの陽炎の箱の中に羽を擡げてはぱらり〳〵と踊れるあり。

わかと肩を並べし姉は、

アラ雀が踊りてよ母ちやん

と呼びぬ。その時家の内なる母は外へ出でて、此の奇異なる女香具師に子の内を喪れたりしが、更に怪みもせざりしやう覚えたり。

姉いま又、

アラあの笠が可愛のね、御覧よ國ちやん紐が赤くてよ

われは國彦と呼ぶ。

見よ、わが足の草履の紐、紅きは如何で讓るべき。

サアサ見さいな、雀踊を見さいな

見よ以下數句甚元妙。小兒の情見ゆ。

一様に笠冠りたる雀は、一様に羽を擴げて
はばたく時は、立つ時は立つで反るまり
偏くまり、ぱらぱらと羽叩きするさま、
まゝ、芝居の所作のトツタリとふるめき
たり。庭一面まちらゝと、陽炎燃えて
確と見るには堪えざりき。
母君の手の内は幾何なりしか、雀はその
價のほど帯納めけん、笠深き女はそも
やはらぱらと高く叫びて手を拍けば、
雀は皆三寸ばかりの蟹を中に取り巻きて

笠深きものは言葉いとゝかとゝのはず。

り。笠冠りたる頭のまゝ蟹の蓋をまた
ぐれば、五分、一寸、二寸、三寸あまり明く
よと見えし、雀は被潜りて皆入りぬ。
母君は再び家のうちへ入りぬ。笠深きものは、
左右の蟹を天秤に張り分けて擔げて
行く。
其後影をわかつの石橋を渡るまで、われ
等二人は立ちて見送りしが、足下にては
たりとよ、見れば唯一羽笠冠りたる雀
なりの善きもの得つと吾等は喜びて、小き

四ツの手に捕へんとす、雀はつつと踏りてぱつちりと踊りつ、逃げつ踊りつ。吾等はあれーーと呼びて追ふ、姉は追縋りて袖もて掩はんとする時、雀は袖の下をかい潜りてぱツと高く飛び上り、今や橋を越えて一丁あまりも行き過ぎたる、香具師の跡追ふて飛ぶりと見えし、盥の上に止まると共に、蓋の上にてぱつちりと又菅ぶ笠深きてるの後の盥なれば眼の及ばざりけん、顧もせず、わが家の隣の門に寄らず又その隣の軒にも立たで、陽炎の裡にまぎれにけり。

陽炎五、

鬱とした静かなる倉をさ點出せるおもしろし

茫然と見送りたる吾は、此處よりも又見ゆる姿は鷺の如く、色は鴉の如く、尾短く嘴尖りたるもの、元の儘に立てるを見る。鶴は猶ほいまだ立ち盡せるなり。

×××××××××××
×××××××××××××

母君のいまはこの世におはさねばやうく能はず、第三の姉に問ふ、斯ることと知らずと答ふ、第二の姉に問ふ、世にあるまじき

ことゝ、り。邪一の妹に問ふ、夢なるどを見しゝにやあらんと言はる。

陽炎燃ゆる春さるりて、白き蝶飛び、黄なる菜花咲くを見ては、故郷をおもひ、幼時をおもひと共に、脚長く尾みじかき鶏などを連想していま に至るまで雀鍋の嫗を忘れず。

雀鍋一篇、人情世態を関すること少しい、却つて大なる價値ありとは云ひ得ざるものなれど、さすがに詩趣甚だ饒く、夢幻的に人の興を惹くことなかるべしの大なり、

鬼史の一章を讀むが如く、鏡花氏の作の一節を讀むが如くにして、鬼史に比すれば、やゝ道理あるをおぼえ、鏡花氏の文に比すれば、針線の密、語辭の精、却つて勝るあるを覚ゆ、著想用筆共に凡ならざる作者の、次には是の如きものを作らずして、眞に小

説として價値あるべきものを作
らんとしたりけんことを望む。

露伴妄評

妙薬奇方集

○鼠或は狂犬に噬まれしときの妙薬

土茯苓 大 川芎 甘草 右六服する奥しに可かへし 翁草

○蜂にさしたるときは芋幹をもて摩擦すべし

○眼中に塵埃入りたるときは南無阿彌陀佛と三度と
なゝべし

漆山家祖先之事

奥羽永慶軍記（元禄十一年戸部一慈正直の著）
巻之廿二、上ノ山合戦會津勢敗軍ノ事ト題シテ
曰ク
上ノ山の城主里見民部少輔が父越後守をば義光
（最上）かはてより山形に差置れ軍奉行ニ申付
られけるが今度上杉の大勢攻入らんと働くにより
つて上の山の城ニ入れ置けり同草刈備前守楯子
志摩守なども上の山の加勢として遣はす甚
如究竟の兵五百餘騎籠城す然るに九月十

七日會津の先手稲村造酒亟椎野彌七郎
上の山城邊に向て城を構へ諸具を小荷駄に
て持運ぶ上泉主水正は遥に隔て陣取り也
是は上杉より後詰の來るを防がんとの軍慮
なり城中是を見て城邊に敵を置いては悪
しからんと評定し里見主水同掃部同東
市正五百餘人大手の城戸押ひらき一度に
さつと突出る會津勢元來期したる事なれ
ば何かはみな〳〵驅くべき拔き連れて驅出し
火をちらし黒烟をしてく命を限りに戰ひ

ける爰に上の山の加勢草刈志摩守は別道
を經て宮ノ下の後陣の中の別なる山上に取上
り合圍の太鼓を打貝を吹き鬨を上ぐる宮
下の先陣是に驚き振返り跡を見れば白羅
に輪違下鱗笹の馬印吹貫堂々翻し二
三百騎樊噲の勢を振て後を押切らんとてありかんづを引取て
後陣の掠と一所に成んと引きける所を草
刈が者共大石を二三十轉し落さば滿々
たる敵人壓る轉すれて死す稲村造

酒巫是を見て此道い叶ふべからずとて屋田
と云所を引きたけ屋田道に入口道廣
くして奥は馬の足叶はず南は山岨つゞき北
は谷川深く纔の細道一筋も難所にして
五十町も廻らざれば後陣と一所に落合
はず先陣の者共滯りて行先は難所なる
ぞと呼傳ふ造酒巫はみつゝ殿して後陣
に在りしが是を聞き先の難所を行詰り
犬死せんよりは爰より取て返し敵に逢う
て討死せんと云ひ馬を叩いて下知

する所に黒見が敦權坂蒲弓衛尉追来り
馬を馳せならべ無手と組む稲村が力や増
さりけん蒲弓衛尉下に成りけれども元来早業
勝れし者なれば力すぐるの剣を下より二刀
刺通し甚まく刎返し首をかく甚外黒見
掃部同東市正真先に進み追かけ
ぜめかけば會津勢返しては討れ追付かれ
ては討れ或い先の難所を行詰り自害を
するもあり會津の先陣已に敗北すと聞え
ければ後に備へし上泉主水正岩井右見守松

平木工丞平岩備前守馬を逸散に駆来る
峰に備へし草刈志摩守待受けて一番
かなば敵を直下うして横合より切てかゝる
民部少輔も向ふさまに突いてかゝる金津
摂心坊ゝとりへとる両所の敵を功められ
八方より崩れを追うけ追詰め討にけり
上泉主水正小尻掃部ゆきけるが五十騎
取つて返し大勢を割つて入り散々に切つ
て廻る爰に草刈志摩守が部等
漆山九郎兵衛是迄敵の大将と見る

より乙馬を駆けうなを押ゆゝ引組
でどうと落ちて上を下へと返しけるを二人
共に谷底へ転び落ちけるを大石岩
角に中を離れ
けるかゝる所に黒田氏部少輔が小姓
に金原七蔵とて生年十五歳に成りしが
轉び落ち敵を見るより馳寄鎧の透
間を丁と突つかれて起きあがらんとする
を逃がさじと取つて押ゆれば首を
切落かきい落す金原七蔵今日初陣成

りしが殊よ容顔窈窕として志又寄も
紅糸よて威しし小具足よ金襴の羽織
着て銀の蛭巻を四本の立物よして誠よ物具
おもて花やかなる甚さき月の如く嬢子なれ
べく見えたれども軍破りて味方の者共
首取て提げ来るを浦山しげよ見えけ
るを大将民部少輔何とも義も首取り
たく思ふと雖ぬ故金原御免なければ
御近習を離れず侵へども心の中も飛立
やうに怪ら申す民部少輔さて賀
ぬるで行きて高名せよと足軽十人を
指添けるが金原賀よ嫁しげよて馬の
腹帯をメ直し何の会釈もなく敵陣
よ攻め入りしが時も移さずさき付の首
一ツ取りて帰りけり民部少輔是を見た
甲の内よ上泉主水正重任と金の蒙眼
にて記せり扱い大将の首取りくりと軍
敷して後山形よ首帳を捧げば義光一
番よ七歳を召出されし見珍ひ幼少なれて
初陣よ大将の首取事世に比類なく柄と

て領地一所を賜ひけるを残らず退出して
後氏家尾張守が方まで詰へけるは今度
大将の首取候事い全く某が手柄なれ
候はず　漆山九郎兵衛が組留め谷へ
投げし候を安と討取候へば此恩賞
は　漆山に譲り給はれと辭しければ
義光隅金原が志を感じ給ひて漆
山にも褒美をぞ給ひける扨も会津
の陣破れしかば元は天童の侍なりし
遠藤小一郎上の山の城を存りしが会津

の郎等本多造酒介を組討にして首討取
て奉りぬ義光斜ならず悦び物見山に於
て實検せらる先一番に上泉主水正稲村
造酒亟様野隅守平岩石見守岩井
備前守松平木工亟を始め二百六十騎其外
首数六百六十三生捕三十人とぞ申えける
かくの如く上の山の寄手い大将討れ敗北すと
いへども長谷堂口の直江は少しも色を屈
せず天を斬し地を畧する勢ひして雑事
に下知し對陣せり所に上方より飛脚到

来りて右田治部少輔殿ゟ原近邊の數ゟ
城攻為されしと書きくゝる狀九月廿五日
に參着す同晦日會津の使直江が陣に
來り其ゝ方の人數速に引取るべしとりひ
いらべ兼續承りて今日引取るゝとせば
待ありし敵とも喰ゆゝと付くべし日
をくゝし身つゝゝ磨して退くべし其用
意せよと思ひやるべし陣ゝに相觸れ
ける

右漆山九郎兵衛後裔　漆山又四郎寫

清方（二代文四郎）歸納　昌

天保二辛卯年首春　松田伊勢正清命畫

漆山喜治とゝ

泰隆（三代文四郎）歸納　忠

安政丙辰四月十三日

米井山現住

大阿闍梨法印秀實

覺

山陽村

係山文四郎

右之儀ニ付テハ組隊世話方ニ相付ル

一隊ニ付テハ十名ニ付新山事

十月廿五日

別紙之通ニ長野名ヲ隊ニ

ニ〜相分ル可申間達ニ付

十月廿五日

内義ニ付申

漆山文四郎

第百三十三号
醫術開業前期試驗及第之證

山形県平民　漆山文四郎
明治六年一月生

明治三十一年四月東京ニ於テ施行セル醫術開業
前期試驗ニ及第スルヲ以テ此證ヲ與フ

明治三十一年六月九日

醫術開業試驗委員長
陸軍軍醫監正五位勲三等足立寛　下

山形縣東置賜郡吉野村大字中儀
五百六十三番地　平民戸主

漆山文四郎
明治六年一月六日生

妻　みよ
明治十四年十月二日生

長女　文子
明治四十四年一月十三日生
四十三　六歳

宮城縣加美郡中新田町鈴木甚助三女

岩川邑袁所百○九番地 岩崎友三郎方二ヲ

二女 高子

大正四年(三六)月十五日生

府下日暮里村字金杉二百七十九番地(才七号地二ヲ)

昭和九年三月三十一日午前十一時死去

三女 光子

大正七年(十一)二月四日生

上谷区谷中清水町二十番地 二ヲ

○文四郎初代

久安浄園上座 安永八亥年閏十月十二日 多門親

著音童子 〃 八月十二日 宮川子

良雲善童女 天明九己酉年閏正月二日 多門娘

心園童女 享和二壬戌年閏十月十九日

○秋山道光信士 文政三辰年九月十日 文四郎娘

○鴻岸妙舟信女 〃 七年二月廿九日 文四郎母

知秋禅童子 〃 八月五日 文四郎孫

珠琳童子 〃 八月七日 文四郎孫

○文四郎二代
豊治長男

○杉屋妙壽大姉　天保七申年十月十六日　泰山文四郎妻

○繁山道昌居士　〃十五辰年十二月廿六日　泰山文四郎事

○文四郎三代
豊治二男
○藤蔭道稱居士　文久元年酉八月十二日　泰山文四郎孫

○文四郎四代
豊治三男
○大道禪智居士　慶應元年乙丑十二月廿三日　泰山文四郎祖父

○恵玉禪童女　天保七申年十月十六日　泰山文四郎

○知勝善孩子　兵吉（又四郎兄）　〃　二年八月九日　〃

○知春善孩子　竹松（又四郎弟）　〃　二年二月十五日　泰山文四郎孫

○觀室妙音大姉　明治九年九月五日　おとり　又四郎妻

○杉岩貞操大姉　明治十七年十二月四日　又四郎母

○祖覺了道居士　明治十八年八月廿八日　又四郎父

東京本郷真砂町二丁目
東京豊島郡上落合
豊島院二丁目

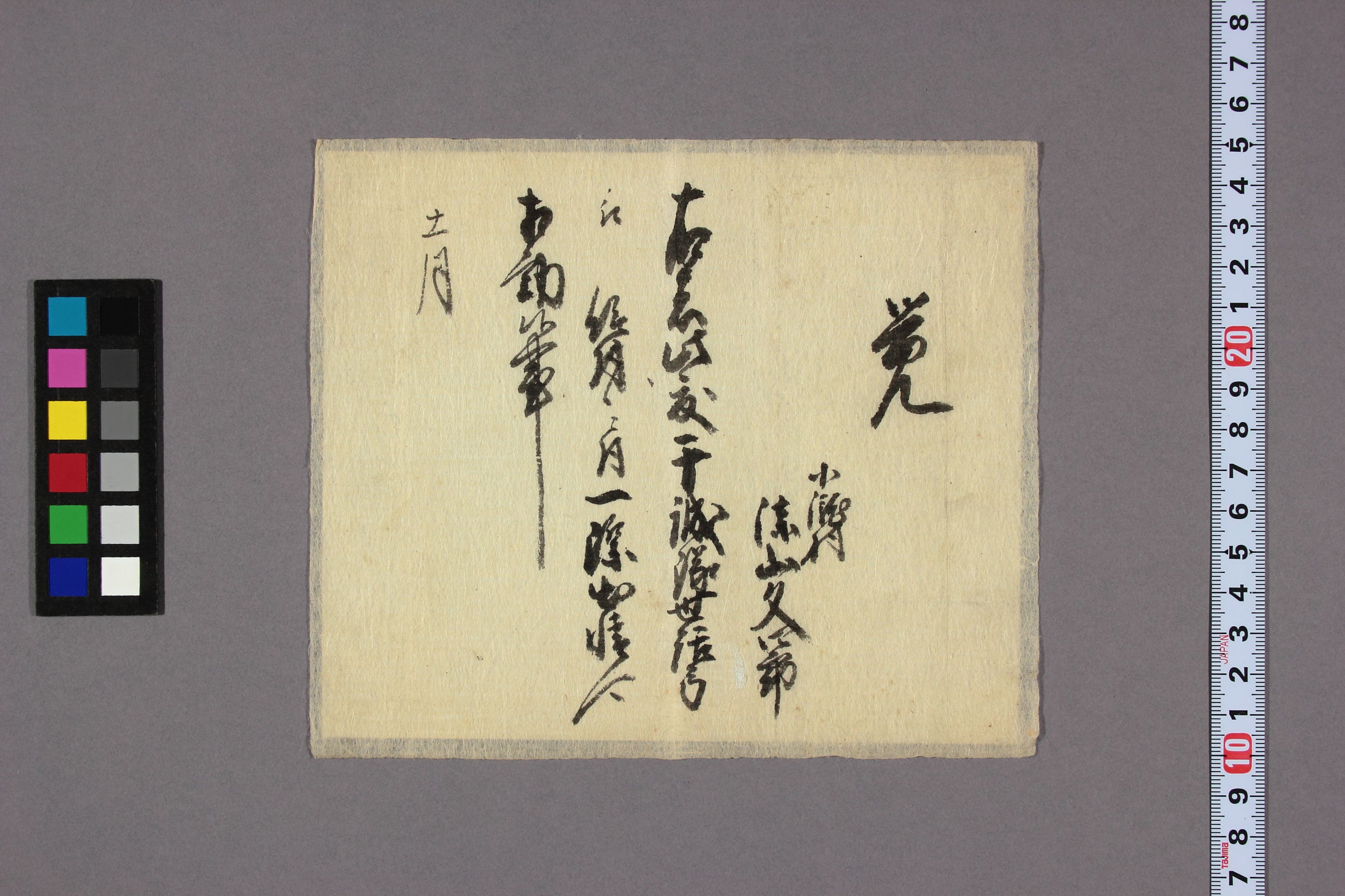
○清安妙淨大姉　明治二十一年六月廿三日　おさの　又四郎母

おさだ（豊治三女）　又四郎姉

おひろ（豊治二女）　又四郎姉

三八〇、〇〇　四十一年　中村　丙午一月吉日より

四一二、〇〇　明治三十九年　翌年一年　露　丙午四月十六日より



覺

小野
佐山久兵衛

東西成平城御書
江戸
御番
一條出羽

十月